

ガリシアにおける地域ナショナリズムの形成及び 発展の歴史的経緯

——スペイン内戦前の歴史的ガリシア主義に関する考察を中心に——

大 木 雅 志

- 一 はじめに
- 二 スペインにおけるナショナリズム
- 三 ガリシアにおける地域ナショナリズムの形成
- 四 ガリシア主義党
- 五 内戦期以降の地域ナショナリズム
- 六 むすびにかえて

一 はじめに

近年、地域ナショナリズムが注目を集めている。最近では二〇一四年一月に実施されたスペインのカタルーニャ

ガリシアにおける地域ナショナリズムの形成及び発展の歴史的経緯（大木）

自治州における民意調査（非公式の住民投票）で投票者の八割以上が「カタルーニャは国家であり、かつ独立すべきである」と投じた。同調査結果を受けて、カタルーニャ自治州議会は二〇一五年一月に「カタルーニャ独立手続き開始宣言」の決議を採択し、二〇一七年には独立の是非を問う住民投票を実施するとしている。これに対して、スペイン政府はカタルーニャ自治州の分離独立を阻止するため、同決議が違憲であるとして、憲法裁判所に提訴している。また、二〇一四年九月にはイギリスのスコットランドにおいても独立の是非を問う住民投票が実施された。イギリス残留派が独立派を上回ったものの、二〇一九年までに二度目の住民投票が実施される見通しである。これらの地域に限らず、各地で地域ナショナリズムが高まりつつあり、これに対して中央政府が阻止するという動きが見られる。

しかし、このような国民国家にかかる問題は今に始まったことではない。特に、スペインにおいてはカタルーニャ、バスク、ガリシアといった歴史的自治州があり、国家と地域、あるいは国家とネイションの関係について長く議論されてきた。前述の通り、カタルーニャでは分離独立の動きもあり、未だに「スペイン国家」という自明性は絶対的に確立されているとは言い難い。

他方、歴史的自治州だからといって、必ずしもスペインからの独立や強い自治権を要求するわけではない。例えば、スペイン北西部に位置するガリシア自治州においては、独自の文化を有しながら地域ナショナリズムはあまり強くはなく、カタルーニャやバスクといったスペインの他の歴史的自治州と比較して、地域ナショナリズムの運動はそれほど活発には行われていない。むしろ、ガリシアは歴史的に保守的な地域であり、二〇世紀に三六年間の独裁政権を築いたフランコ將軍や民主化以降スペインの二大政党制の一翼を担ってきた国民党（PP）の創設者であるマヌエル・フラガといった保守系政治家を輩出している（他方で、PPと共に二大政党制のもう一翼を担ってきたスペイン社会労働党（P

SOE)の創設者であるパブロ・イグレシアスもガリシア出身である。また、フランコ死後に実施された自治州議会選挙においても、現在に至るまで保守系全国政党が第一党の座を維持し続けている。したがって、歴史的に独自の文化と歴史を歩んできた自治州であっても、必ずしも分離独立や今よりも強い自治権の要求にはつながらないのである。

ガリシアは、同じ「スペイン」という国民国家に属しながら、カタルーニャやバスクのように地域ナシヨナリズムが顕著でないのはなぜか。その理由のひとつとして、ガリシア人固有の「二重のアイデンティティ」が挙げられる。ガリシア人は、カタルーニャ人やバスク人と比較して、「スペイン」と「地域」への二重のアイデンティティを有する住民の割合が多いという特徴を有する。⁽¹⁾このような二重のアイデンティティという特殊性が形成されたのは、スペイン人としての国民意識の形成とガリシアという「ネイション」へのアイデンティティの形成が同時に行われたことが背景にある。歴史的自治州にもかかわらず、スペイン人としての国民意識が形成された理由として、ガリシアは歴史的に農村部において教会の影響力が強く、現状維持を求める保守的思想が根強かったという見方もある。また、スペイン国内においても貧困地域であったため、産業が発展していたカタルーニャやバスクのように積極的にスペインから分離するという政治的決断には至らなかったためとも考えられる。

本稿においては、ガリシアにおける地域ナシヨナリズムの発展経緯に着目しつつ、ガリシアにおいて地域ナシヨナリズムが相対的に弱くなった要因について考察する。ガリシアは、スペイン内戦やフランコ独裁、民主化といった特殊事情があつたにせよ、一九世紀から二二世紀初頭までの短期間に地域ナシヨナリズムの萌芽、誕生、発展、衰退、復活、成長及び分裂を経験した地域である。本稿ではガリシアにおける地域ナシヨナリズムがどのような経緯で生じ、発展したのかについて、特に一九世紀から二〇世紀前半までの歴史に主眼を置きつつ、ガリシアの特殊性について考察する。⁽²⁾

二 ス페인におけるナシヨナリズム

スペインにおいては、ナシヨナリズム (nationalismo) と言った場合、スペインの国民的一体性を含意する「スペイン・ナシヨナリズム」を意味する場合とカタルーニャやバスク、ガリシアといった地域が自らの権利を主張する「地域ナシヨナリズム」を意味する場合がある。スペイン主義者にとって、スペインは「ネイション」である一方、地域ナシヨナリストにとってスペインはあくまでも作爲的な「国家」であつて、自らが「ネイション」なのである。⁽³⁾ すなわち、スペインにおいては、スペインという国民国家が所与の存在には至っていないのが現状である。これについてアントニー・D・スマスは、一七世紀までにスペイン国家がかなり弱体化し、その浸透力を社会的・地理的に広げたり深めたりすることができなかつたため、統一性に欠けたナシヨナル共同体になつてしまつたと指摘している。⁽⁴⁾

また、スペイン国民の文化的・言語的統合化の展開が不十分であつたためとの見方もある。⁽⁵⁾ スペインにおいては、スペイン中央部のカステイリヤ地方で話されていたカステイリヤ語が「スペイン語」とされているが、その他にもカタルーニャ語、バスク語、ガリシア語、アラゴン語、アストウリアス語等が話されている。現在においてもカステイリヤ語(スペイン語)を母語とする地域は、スペイン全体の面積の七割程度となつている。⁽⁶⁾ 国家公用語としてのが挙げられる。また、国民国家形成において通常起こる法典・裁判システムの一元化や度量衡の統一といったことも十分進まなかつた。⁽⁷⁾ さらに、軍隊が国民国家形成の機能を果たすことがなかつた点も指摘されている。内乱や戦争で

軍隊が投入され、略奪等が行われたことにより、反軍感情が根強く、徴兵忌避率も高かったという。一八九八年の米西戦争における敗北により、スペイン国家の存立基盤が崩され、地域ナショナリズムの正統性を高めたとの見方もある。⁽⁸⁾

このような背景から一九世紀後半にカタルーニャやバスク、ガリシアにおいて地域ナショナリズムの動きが始まるのである。

三 ガリシアにおける地域ナショナリズムの形成

ガリシアはスペイン北西部に位置する地域である。紀元前にはケルト人が定住し、古代ケルト文化を形成した。その後、ローマ帝国の支配下に入るが、ローマ文化一色に染まることはなく、固有の文化と融合させた独自文化を築き上げた。ゲルマン民族（スエビ、西ゴート）やアストゥリアス王国等による支配の後、カトリック両王（カステーリヤ女王イサベル一世とアラゴン王フェルナンド二世）によってガリシアの「スペイン化」が進められる。スペインにおいて自由主義改革が進展すると、他地域と同様にガリシアにおいても地域ナショナリズムが芽生え始める。以下では、ガリシアにおける地域ナショナリズムの発展経緯について述べる。

ガリシア研究において、ガリシア固有のアイデンティティを重視する思想は「ガリシア主義 (galleguismo)」と呼ばれている（「ガリシア・ナショナリズム」と「ガリシア主義」はほぼ同義で使用されており、以下ではガリシアにおける地域ナショナリズムに言及する場合「ガリシア主義」の用語を使用する）。ガリシア主義は、スペインの中央集権化が進んだ一九世紀

表 1 ガリシア主義の変遷

年代	19世紀		20世紀				21世紀			
	1840-1886	1886-1916	1916-1931	1931-1936	1936-1963	1963-1982	1982-2012	2012-現在		
分類	プロビンシアリズム		リージョナリズム		ナショナリズム					
					初 期	発展期	衰退期	新しいナショナリズム		
								復活期	成長期	分裂期
中心組織	サンティアゴ文学アカデミー	ガリシア地域主義協会、ガリシア連盟	ガリシア語友の会	ガリシア主義党	ガリシア評議会、ガラクシャ社	ガリシア人同盟・ガリシア社会党	ガリシア・ナショナリスト・プロック	ガリシア左翼オルターナティブ		
スペインにおける政治体制	王政 (-1873) 第一共和政 (1873-1874)	王政復古 (1874-1931) プリモ・デ・リベラ独裁 (1923-1930)	第二共和政 (1931-1939) スペイン内戦 (1936-1939)	フランコ独裁 (1939-1975)	民主化 (1975-1978) 立憲君主制 (1978-)					

(出所：Beramendi, Justo, *El nacionalismo gallego*, Madrid: Arco Libros, 1997 を参考に筆者作成。ナショナリズム以降については筆者による分類)

に発生し、二〇世紀初頭にかけて徐々に高まりを見せた。その発展段階に応じて、「プロビンシアリズム（一八四〇―一八八六）」、「リージョナリズム（二八八六―一九一六）」、「ナショナリズム（一九一六―）」と分類されている。特にナショナリズムについては、「ガリシア語友の会」による活動を中心とする「初期ナショナリズム（一九一六―一九三二）」、「ガリシア主義党」を中心とする「発展期ナショナリズム（一九三二―一九三六）」、「スペイン内戦によってガリシア主義者の多くが亡命した「衰退期ナショナリズム（一九三六―一九六三）」、現代における「新しいナショナリズム（一九六三―）」に分けられる（表1参照）。

三―一 プロビンシアリズム

一九世紀のガリシアでは、中世から続いていたガリシア王国が存続する一方、政治的にはスペインの中央集権化が進んでいたため、ガリシア王国の権力は限定的であった。一八三三年、行政改革により、スペイン全国が四九県に区分され、中央集権化がさらに進められようとしていた。ガリシアは、ア・コルーニャ、ルー

ゴ、オウレンセ、ポンテベドラの四県に分断され、ガリシア王国は消滅した。このような中央政府の決定に対して、かつての統治形態（ガリシア王国）の復活を求める動きが生じた。これが後にナシヨナリズムに発展する「プロビンシアリズム」の始まりである。

プロビンシアリズムの中心人物のうち半数は大学生であり、残りは医者や大学教員、弁護士等の都市部の上流・中流階級であった。彼らの多くは、一八四〇年にサンティアゴ・デ・コンポステラに設立された「サンティアゴ文学アカデミー」に所属していた。「サンティアゴ文学アカデミー」の中でも、新聞記者であったアントリン・ファラルドは、数々の文書を発表し、プロビンシアリズムを喚起した。プロビンシアリズムの運動は一部で過熱し、一八四六年、軍人のミゲル・ソリスがルーゴで蜂起し、県評議会と県議会の解体を宣言した。しかし、最終的には鎮圧され、ソリスを含めて二二名が処刑された。ソリスの蜂起に参加したファラルドも国外追放され、有罪確定の後に恩赦を与えられて帰国するも一八五三年に死亡した。

ソリスの蜂起の失敗とファラルドの死によって、プロビンシアリズムの運動は下火になりかけたが、「サンティアゴ青年協会」が設立され、プロビンシアリズムの継承者の育成が図られた。また、プロビンシアリズムはサンティアゴ・デ・コンポステラだけでなく、ア・コルーニャやその他の都市へと波及し、拡がりを見せた。しかし、プロビンシアリズムはエリート層を中心とする個人の集まりに過ぎず、組織力に欠けていたため、その後、政治的に大きな動きを見せることはなかった。

プロビンシアリズムの担い手も大学生から上級専門職等へと構成が変化し、ガリシア語による出版物が多く出版された。ロサリア・デ・カストロ、エドワルド・ボンダル、マヌエル・クロス・エンリケスらが中心となり、「レシユ

ルディメント（ガリシア語で「ルネッサンス」の意）と呼ばれる文芸復興運動が起こり、盛り上がりを見せた。

他方、歴史家の間でガリシアの独自性（ガリシア性）に関する議論も沸き起こり、『ガリシア史』を執筆したベニト・ピセツトは、ガリシア人の独自性として、人種（かつてガリシアに居住していたケルト人）及び民族精神（フォルクスガイスト）を説いた。また、先述のロサリア・デ・カストロの夫であるマヌエル・ムルギアもガリシアはスペインとは全く異なるネイションであると主張した。ムルギアは、『ガリシア史』において、ガリシア・ネイションをガリシアの地に定住したケルト人種であるとした上で、歴史の過程で固有のフォルクスガイストが築かれたとしている。このような歴史主義もプロビンシアリズムの特徴である。

このように、プロビンシアリズムの活動の中心は、ガリシア語による文学復活の推進であったため、基本的には文化・知識活動の領域を脱することはなかった（ソリスの蜂起のように一部で政治的な動きも見せた）。その分、上述の通り、ガリシア文化は一九世紀後半に大きく発展した。

三一二 リージョナリズム

一八八六年、マヌエル・ムルギアは『先駆者たち』を発表し、ガリシア主義がプロビンシアリズムから次の段階、すなわちリージョナリズムへと移行していることを説いた。またムルギアは、『ガリシア地域』を発表し、ガリシアがネイションとなりうるためのすべての条件を備えている旨主張した。リージョナリズムは、ムルギアを中心とするリベラル派の他、アウレリアノ・シヨセ・ペレイラ・デ・ラ・リバの連邦派やアルフレッド・ブラーニャスの伝統派を中心に展開していく。

表2 ガリシアにおけるリージョナリズムの分類

	リベラル派	連邦派	伝統派
思想	資本主義、社会近代化、懐古主義の排除、民主主義	急進的な民主共和主義	協調組合主義、カトリック
中心人物	マヌエル・ムルギア	アウレリアノ・ショセ・ペレイラ	アルフレッド・ブラーニャス
組織	ガリシア地域主義協会 ⇒ガリシア連盟（ア・コルーニャ）	ガリシア地域主義協会 ⇒自由融合党	ガリシア地域主義協会 ⇒ガリシア連盟（サンティアゴ・デ・コンポステーラ）

（出所：筆者作成）

リベラル派はプロビンシアリズムの直接的系統であり、資本主義、社会近代化、懐古主義の排除を目指した。政治的には真の民主主義を目指し、最も多くの支持者を集めていた。連邦派は、急進的な民主共和主義を志向し、農民層の支持獲得を図ったが、それほど大きな影響力を有していなかった。伝統派は、その名に反して、ガリシア主義で最も新しい思想であるが、カトリック及び過去への回帰を擁護し、資本主義及び自由主義を批判した。それぞれの主張は異なるものの、ガリシアが固有の文化・言語の再生及び政治的自治の権利を有する「地域」または「ナショナリティ」である、という点において見解を同じくしていた。

一八九〇年、三つの潮流は合流し、「ガリシア地域主義協会」が設立された。構成員のほとんどは上級専門職や公務員であり、プロビンシアリズムとそれほど大きな違いを見せず、文化・知識活動が中心であった。機関誌『祖国ガリシア』を刊行したが、組織の方針が漠然としていたため大きな政治運動には発展せず、設立からわずか三年間で解散した。

その後、リベラル派のムルギアはア・コルーニャで「ガリシア連盟」を結成し、伝統派のブラーニャスも同名の組織をサンティアゴ・デ・コンポステーラで結成した。しかし、都市部や農村部の労働者の関心を集めることができず、

政治的には目立った成果を出すことができなかつた。連邦派のペレイラは、スペインの自由融合党に加盟するためにマドリードに拠点を移したため、実質的に消滅した(表2参照)。

ガリシアにおけるリージョナリズムは、引き続き文化的側面が強かつたが、一九〇七年、カタルーニヤの政治運動の影響を受けて「ガリシアの連帯」が発足した。「ガリシアの連帯」は、反首長主義を掲げ、農民の支持を獲得することに成功した。それまでのリージョナリズムは、文化活動や理論形成に終始していたため、ガリシア全体への拡がりにつながっていなかつたが、少しずつ政治的な側面を見せ始める。後にガリシア主義を象徴する新聞へと成長することとなる『ア・ノーサ・テラ(我が大地)』が創刊されたのもこの頃である(「ガリシアの連帯」の機関紙として発行された)。

三一三 初期ナシヨナリズム

ガリシア主義は徐々に政治的な要素を帯び始めたが、その担い手のほとんどは上級専門職や公務員のままであつた。また、ガリシア主義の各派閥を収斂する組織も存在していなかつた。しかし、「ガリシア語友の会」の発足をきっかけに少しずつであるが、ガリシア主義の組織化が進むこととなる。

一九一六年、『ラ・ボス・デ・ガリシア』紙の記者であつたアントン・ビジャル・ポンテは、「言語友の会」の設立を呼びかけると共に、『ガリシア・ナシヨナリズム』を発表した。その後、「ガリシア語友の会」が正式に発足し、ガリシア主義はナシヨナリズムの時代を迎えることとなる。

「ガリシア語友の会」は、機関紙として、「ガリシアの連帯」がかつて発行していた機関紙と同名の『ア・ノーサ・

表3 初期ナショナリズムの分類

	リベラル民主派	新伝統派	分離派
思想	ナショナリズムは、自由、物質的・知的発展及び進歩的民主主義を実現するための手段であるとする立場。リージョナリズム時代のリベラル派の思想を継承。	カトリック社会主義を基本としつつ、フォロ制といった伝統的な社会経済制度を否定する立場。リージョナリズム時代の伝統派の思想を継承。	ガリシアの独立を求める立場。スペインをネイションと認めつつも、ガリシアはスペインに属しないと主張。
中心人物	ビジャル・ポンテ兄弟、アルフォンソ・カステラオ	ビセンテ・リスコ、ラモン・オテロ・ペドラージョ	フコ・ゴメス、アルバロ・ダス・カサス
組織	ガリシア語友の会⇒ガリシア自治共和主義組織	オウレンセ共和ナショナリスト党、ガリシア・ナショナリスト友の会	ガリシア分離主義者革命委員会、ボンダル・ナショナリスト協会、ガリシア・ナショナリスト前衛派

(出所：筆者作成)

テーラ（我が大地）を発行し、政治活動を始めた。一九一八年、「ガリシア語友の会」は、第一回ナショナリスト会議を開催し、リージョナリズムからナショナリズムへの発展が発表された。また、同会議では、「統合的自治の実現、すなわちカステイレーリヤ、カタルーニヤ、バスク及びガリシア（可能であればポルトガルも）による連邦制」、「ガリシア語化（ガリシア語及びカステイレーリヤ語の公用語化、教育におけるガリシア語の優先的使用等）」、「政治行政改革（首長主義の排除等）」及び「社会経済改革」が宣言された。

一九二〇年には、ビセンテ・リスコが『ガリシア・ナショナリズム論』を発表した。リスコは、ムルギアの思想を踏まえつつ、哲学的非合理主義、地理的決定論、新伝統主義、民族誌学等の様々な視点を組み合わせてナショナリズム論を展開し、ネイションを「自然にあるもの、種としてあるもの、人間の意思から独立したものと定義づけた。その上で、「ガリシアは既にネイション

である」と結論づけている。リスコにとって、ネイションとは、人間の意思によって偶発的に生じたものではなく、自然そのものなのである。人種及び大地によって民族精神（フォルクスガイスト）が生まれ、そこからエスニシテイ（言語及び文化）が歴史的に形成されると説明している。⁹⁾

ガリシアの初期ナシヨナリズムは、その思想の違いにより、リベラル民主派、新伝統派、分離派に分類される。リスコを中心とする新伝統派は当初、ガリシア語友の会に参加していたが、一九二二年に選挙の参加を巡ってリベラル民主派と対立して脱退し、「ガリシア・ナシヨナリスト友の会」を新たに結成した。しかし、一九二三年にプリモ・デ・リベラの独裁が始まると、ほぼ全ての友の会が解散に追い込まれ、ナシヨナリズムが中断した（表3参照）。

一九二九年、独裁体制が弱体化すると、ビジャル・ポンテとカサレス・キローガは「ガリシア自治共和主義組織（ORGA）」を立ち上げ、ガリシア全体で友の会の再結成が図られた。一九三〇年、ORGAは、急進党、共和急進社会主義党及び連邦共和党とレストロベ協定を結び、選挙連合「ガリシア共和連盟（FRG）」を結成した（その後、急進党と共和急進社会主義党は脱退）。一九三一年にスペイン第二共和政が成立すると、制憲議会選挙が実施され、FRGは一五議席を獲得した。ガリシアのナシヨナリストがスペインの国政に進出したことにより、ガリシアの自治推進に期待が寄せられたが、ORGA党首のキローガが入閣すると、ORGAは共和政の安定に重点を置き始めた。当初はガリシアの自治を目指して結成されたORGAであるが、国政進出後はガリシア主義者にとってもはや足枷となっていた。その結果、ORGAの一部のナシヨナリストらは苛立ち始め、ガリシア主義党が結成されることとなる。¹⁰⁾

四 ガリシア主義党

一九三一年末、ORGAの一員であったアルフォンソ・カステラオは、ポンテベドラで第七回ナシヨナリスト会議を招集し、ガリシア語友の会等、計三三団体が出席した。初期ナシヨナリズムの中心組織であったガリシア語友の会においては、各派閥の思想の対立によりナシヨナリストが各団体に離散してしまつたが、同会議では、新たに各思想を超えたガリシア・ナシヨナリズムの政党「ガリシア主義党」の発足が宣言された。

ガリシア主義党は、ガリシア・ナシヨナリズムの政治活動を目的とした初めての政党であり、その点でガリシア語友の会とは異なる。また、プロビンシアリズムや、リージョナリズム、ガリシア語友の会による初期ナシヨナリズムの支持者の多くは、エリート層であつたのに対し、ガリシア主義党は、より幅広く、様々な層からの支持を集めた。⁽¹⁾

四―一 ガリシア主義党の方針

ガリシア主義党は、綱領を定め、四つの原則宣言「文化的一体性としてのガリシア（言語、芸術、精神といったガリシアの特性の定着）」、「自治的民衆としてのガリシア（共和国政府の枠組みにおけるガリシアの政治的自決権）」、「協同的共同体としてのガリシア（労働のための大地、大地のための労働）」、「普遍性の単位としてのガリシア（反国際帝国主義、平和主義）」を掲げた。また、ガリシア語友の会と同様に、機関紙として、『ア・ノーサ・テラ（我が大地）』を発行した。ガリシア主義党は、「様々な社会階層の支持獲得」及び「共和国憲法内でのガリシアの自治推進」に重点を置いて

表4 ガリシア主義の参加者の構成

	プロビンシアリズム			リージョナリズム			ナショナリズム			
	前期	中期	後期	ガリシア 地域主義 協会	ガリシア 同盟	リージョ ナリスト	ガリシア 語友の会	ガリシア主義党		
年	1840- 1846	1847- 1868	1869- 1885	1890- 1893	1897- 1906	1886- 1916	1916- 1931	1931	1933	1936
会員・党員数	69名	150名	182名	73名	105名	557名	976名	756名	2,340名	4,582名
会員・党員数内訳 (%)										
地主		4.7	6.0	5.5	2.8	4.5	1.6	2.5	1.1	1.2
上級専門職、 上級公務員、 経営者	17.3	25.3	25.7	39.7	14.3	23.3	22.9	16.7	6.2	4.2
軍人	1.4	2.0	1.1		0.9	1.8	0.5			
教員 (中等 教育以上)	5.8	9.4	8.7	11.0	4.7	7.5	6.8			
聖職者	2.9	5.3	4.4	4.1	2.8	4.8	1.9	0.3		
学生	49.2	4.0	1.6	2.7	0.9	3.0	6.3	9.4	11.3	8.8
商業者、小 規模経営者	5.7	6.0	4.9	5.5	10.5	7.2	12.4	13.3	8.8	8.1
中級専門職、 ジャーナリス ト、芸術家	2.8	8.7	10.4	10.9	4.7	8.9	9.3	4.2	2.3	2.1
中級公務員 等	2.9	9.3	11.4	5.5	11.4	7.7	6.4	21.3	15.2	12.5
手工業者		2.0			0.9	1.8	2.2	4.7	9.5	11.4
農民、漁民							0.8	3.4	17.7	27.3
その他	1.9	3.3	6.6	4.2	5.2	7.4	12.5	4.5	8.6	8.1
職業不明	10.1	20.0	19.2	10.9	40.9	22.1	16.4	19.7	19.3	16.3

(出所：Beramendi, Justo, *El nacionalismo gallego*, Madrid : Arco Libros, 1997, pp. 11, 16, 27, 41, 56 のデータを基に筆者作成)

活動を開始した。スペイン中央政府との対立ではなく、共和国内における自治推進という現実的姿勢を示したことにより、ガリシア主義党は支持を拡大した。ガリシアにおけるリージョナリズムや初期ナショナリズムでは、中心組織の支持層は主に都市部の住民であったが、ガリシア主義党は都市部だけでなく農村部にも活動を広げ、また、青年団体（ガリシア主義青年連盟）を設立し、様々な層の支持獲得を目指した。一九三一年の結党当時の党員七五六名のうち農村部の党員は一四一名（全体の一八・七％）であったが、一九三六年には党員四、五八二名のうち一、七六四名（全体の三八・五％）へと拡大した。⁽¹²⁾ その結果、ガリシア主義党は、スベ

ン内戦前における最も大きなガリシア・ナシヨナリズム政党へと成長した。

表4が示すように、ガリシア主義党は特定の社会階層だけの支持を獲得する政党ではなく、支持層が多様化しており、スペイン内戦が発生しなければ、政党支持及び党員数をさらに拡大していた可能性もある。他方、ガリシア主義党は、ガリシア・ナシヨナリストの結集を呼びかけ、共和国内での自治推進を最低限の目標として、様々な思想の枠を超えて党員の取り込みを図っていたが、それはすなわち、党内の対立を生む危険性をはらんでいた。

ガリシア主義党のもう一つの大きな成果として、ガリシアの国際社会への参加が挙げられる。ガリシア主義党創設メンバーのひとりであるブラッシッド・カストロは、一九三三年九月にスイスで開催された第九回欧州ナシヨナリテイ総会にガリシアの代表として参加している。

四―二 ガリシア自治憲章

ガリシア主義党は、ガリシアの自治獲得のため、ガリシア自治憲章の早期策定を目指した。ガリシア主義党は様々なメディアを活用して働きかけを行った結果、一九三二年一二月に開催された市町村代表者会議で自治憲章案が七七・四%の賛成で可決された。

ガリシア自治憲章案において、ガリシアは「共和国憲法及び本自治憲章に基づく、スペイン国家の自治地域」と定義づけられた。また、公用語をカステイリア語（スペイン語）とガリシア語とし、ガリシア自治政府（Xunta de Galicia）及びガリシア議会、ガリシア地域代表（Presidente da Rexión）の設置を明記した。

自治憲章を成立させるためには、住民投票と国会承認の手続きが必要であり、ガリシア主義党、ガリシア共和党（O

RGAの後継政党）及び共和行動党（スペイン共和国首相のアサーニャを党首とする政党）は自治憲章プロバガンダ委員会を設置して早期手続きを目指した。しかし、住民投票の手続きが遅々として進まなかった。自治憲章プロバガンダ委員会にも参加していたガリシア共和党と共和行動党が住民投票に消極的になったためである。その理由として、「住民投票の失敗による中央政府への政治的打撃」、「左翼基盤の弱いガリシアで保守的自治政府が誕生して、中央政府の改革を反故にする危険性」があったためとする見方もある。¹³ガリシア主義党の国会議員であったカステラオ、オテロ・ペドラージョ、スアレス・ピカージョは演説を行い、中央政府に住民投票の手続きを進めるよう圧力をかけた。

しかし、この頃スペインでは、独ナチスの影響を受けた右翼が台頭し始めており、一九三三年一月に行われた総選挙では右翼が圧勝し、アサーニャ内閣は失脚した。同選挙で成立したレルー内閣の二年間は「暗い二年間」と呼ばれ、「逆コース」が進行した。これにより、ガリシア自治憲章の手続きは中断し、一九三四年の一〇月闘争以降は、ファシズムによるガリシア・ナシヨナリズムに対する弾圧が一層強まった。

カステラオらガリシア主義党執行部は、危機感を覚え始め、ファシズム打倒のために左翼との共闘を模索し始めた。一九三五年、ガリシア主義党は共和国誕生四周年記念行動に参加し、アサーニャ率いる共和主義左翼に接近した。最終的にガリシア主義党は、アサーニャを首班とするスペイン人民戦線に参加した。しかし、ガリシア主義党の左翼への接近は、元々様々な派閥の集まりである党内の対立を生み、リスコら新伝統派が離党した（リスコは一九三六年四月にガリシア主義右翼を結成した）。

一九三六年二月の総選挙で人民戦線が勝利し、ガリシア主義党からは、カステラオ、スアレス・ピカージョ、アントン・ビジャル・ポンテの三名が議員に選出された。アサーニャ人民戦線政府の下、同年六月二八日にガリシア自治

憲章案が住民投票にかけられることとなった。住民投票では投票率は七四・五二％に留まったが、そのうち賛成票は九九・〇五％（有権者全体の約七四％）となり、憲法で規定された有権者の三分の二を超える賛成を獲得した。同年七月一日、カステラオらは、国会にガリシア自治憲章案を提出した。しかし不運にも、わずか二日後の七月一七日、スペイン内戦が始まった。

五 内戦期以降の地域ナショナリズム

五―一 ガリシア主義党の分裂

スペイン内戦が始まると、ガリシアはまもなく反乱軍の支配下に入り、ガリシア主義に関する活動が禁止された。アレシヤンドレ・ボベダ等のガリシア主義党の指導部数名が処刑された。一方、住民投票で可決されたガリシア自治憲章案の結果を報告するため、内戦勃発当時、ガリシア主義党の指導者の一部がマドリードに滞在しており、難を逃れることができたとも言われている。

カステラオもその一人であり、マドリードにいたため反乱軍による弾圧を免れることができた。カステラオは、バルセロナに避難した後、バルセロナに移った。ガリシア主義党はカタルーニャ自治政府の保護を受けながら活動を続けた。カステラオは『ノバ・ガリシア（新しいガリシア）』を通じてファシズムを批判した。一九三九年、バルセロナとマドリードが陥落し、内戦が終結すると、ガリシア主義党の党員の多くがフランスやラテンアメリカ（キューバ、アルゼンチン、ウルグアイ等）に亡命する一方、一部はスペインに残った（カステラオは一九三八年にニューヨークに亡命）。

一九世紀後半から一九三六年までにかけて地域ナショナリズムの思想が少しずつ浸透し、地域政党が誕生し、住民投票においてガリシア自治憲章が可決するところまで辿り着いたガリシア主義であるが、皮肉にもガリシア出身のフランコ將軍によつて弾圧されることとなった。スペインはその後「逆コース」を辿ることとなり、ガリシア主義の運動は大きく後退する。ガリシア主義は、フランコ独裁末期に「新しいナショナリズム」と呼ばれる運動が再興するまでの間は、スペイン国外での活動やスペイン国内における地下活動が中心となった。

このように活動拠点が分散化されたことが、フランコによる思想教育の影響を強く受けることにつながり、元々保守的思想が根強かったガリシアにおいてさらにその傾向を強めた原因のひとつとも考えられる。特に、ガリシア主義の中心人物であったカステラオが亡命したことの影響は大きい。フランコ死後、歴史的自治州のカタルーニャやバスクが自治拡大や独立の動きを見せる中、ガリシアにおける自治州議会選挙において、保守系全国政党が第一党を守り続けている理由もフランコ独裁体制期におけるガリシア主義の後退が影響していると言えるだろう。

五―二 亡命派によるガリシア主義

ガリシア主義者の亡命先で最も重要な拠点はアルゼンチンのブエノスアイレスである。ブエノスアイレスには元々ガリシア移民も多く、一九四〇年代には約四〇万人以上のガリシア移民がブエノスアイレスに居住していたと言われ、「ガリシアの五番目の県」とも呼ばれていた。⁽¹⁴⁾ガリシア・センターを中心にガリシア主義運動が展開されていた。

一九四〇年七月、カステラオは、ブエノスアイレスに移住すると、「海の向こうのナショナリズム」として、ガリシア主義の再興を試みた。ガリシアから遠く離れた大陸であるにも関わらず、カステラオは精力的に講演を行い、ガ

リシアがネイションであることを訴え続け、ブエノスアイレスのガリシア出身移民や亡命者の組織化を図った。しかし、ガリシア出身であったからと言って、直ちにカステラオの運動に加わるといふ簡単な構造ではなく、当然スペインの全体主義に傾倒するガリシア出身者の団体もあり、思想的に対立する場面もあった。このような事情もあり、カステラオの思想はより急進的なガリシア主義へと変遷していったとも考えられる。

一九四一年一二月、ブエノスアイレスにおけるガリシア主義の主要勢力であった「ガリシア主義者グループ」や分離主義派の「ボンダル・ナシヨナリスト協会」等の団体が結束し、「ガリシア友の会」が発足した。内戦直前に実施された総選挙でガリシアから選出された議員のひとりであるアントン・アロンソ・リオスが会長となり、カステラオは名誉会長として活動に参加した。

ガリシア友の会の活動目的は、内戦中に分断されたガリシア主義の団体を再組織化し、ガリシア主義党を復活することである。ガリシア友の会は、首都ブエノスアイレスだけでなく、ロサリオ市やメンドーサ市、ラ・プラタ市といったアルゼンチン国内の都市にも活動を広げ、モンテビデオ（ウルグアイ）、サンティアゴ・デ・チリ（チリ）、ハバナ（キューバ）、メキシコシティ（メキシコ）、ニューヨーク（米国）等にも同名の組織を立ち上げた。

一九四二年六月二八日には、機関紙として『ア・ノーサ・テラ』の発行を開始した。同名の機関紙は、初期ナシヨナリズム期にガリシア語友の会が、その後、ガリシア主義党が発行しており、その時代のガリシア主義の中心組織が使用を許された象徴的な意味合いを有する。創刊日である六月二八日は、ガリシア自治憲章が住民投票にかけられた日でもあり、ガリシア自治憲章の承認に向けた決意も窺える。また、ガリシア友の会は、ガリシア主義党の中心人物であり、内戦直後に処刑されたアレシヤンドレ・ボベダに敬意を払うため、同氏が処刑された日を「ガリシア殉教者

の日」と定めた。

カステラオは、亡命したガリシア、カタルーニャ及びバスクの地域ナショナリズム勢力の再結集を試みた。同地域はかつて「ガレウスカ (Galensca)⁽¹⁵⁾」の名前で一九三三年に七月に連携協定を締結されたが、一九四一年五月、三つのネイションの自決権を獲得に向けて、亡命の地アルゼンチンで再び署名されることとなった。特に目立った活動は行われなかったが、一九四四年二月にメキシコで三地域の代表が集まる会合で採択され、「国際的ファシズムに対して、三つのネイション (ガリシア、カタルーニャ及びバスク) の自由、主権及び自決権のために共に闘う」旨を確認した。一九四五年から一九四六年にかけては、雑誌『ガレウスカ (Galensca)』が発行され、将来の連邦制国家建設のため、政治や経済について議論が交わされた。

また、同じ頃、カステラオを中心とする亡命中のガリシア主義者は、カタルーニャ及びバスクのナショナリストからの働きかけもあり、ガリシア亡命政府の設立の検討を始めた。一九四四年一月、ウルグアイのモンテビデオにおいて、「ガリシア評議会 (Concello de Galiza)」が発足した (カタルーニャ及びバスクについては、パリやロンドンに亡命したナショナリストを中心に亡命政府が発足していた)。同評議会には、カステラオを議長として、アントン・アロンソ・リオス、ラモン・スアレス・ピカージョ、エルピディオ・ビジャベルデ・レイといった元ガリシア選出国会議員が参加した。一九四五年には、第二共和政期に首相を務めたマヌエル・ポルテラ・バジャダレスが参加した。

スペイン国内においては、フランコ政権がドイツやイタリアの支援を受けて独裁体制の確立を図っていた。一九四五年にドイツが連合国に降伏すると、フランコ政権も連合国によって打倒されてスペインの政治体制も一変するのではないかと期待が高まり、亡命派の中には帰国の準備を始める者もいた。⁽¹⁶⁾しかし、第二次世界大戦後に冷戦が

始まると、西側諸国は反共主義の立場をとるフランコ政権を容認することとなった（ただし、国連において、ファシズム下にあるスペインが批判された）。

他方、ガリシアにおいては、ラモン・ビニエイロを中心にガリシア主義の復活が図られた（以降、国内を中心に活動したガリシア主義勢力を「国内派」と呼ぶ）。国内派は、ガリシア主義の拠点は南米ではなくガリシアにおいて設立すべきであるとして、カステラオを中心に設立されたガリシア評議会の設立に反対した。

国内派による批判によって、組織としての正統性を欠いたガリシア評議会であるが、「ガレウスカ」を後ろ盾に信頼獲得に努めた。一九四五年一〇月、ガリシア評議会のメンバーは、スペイン共和国亡命政府の招集に応じて、メキシコを訪れ、スペイン共和国亡命議会の議員に対して、ガリシアの自治権の必要性について訴えかけた。努力の甲斐もあり、同年一月に開催されたスペイン亡命共和国議会では、ガリシア自治憲章委員会が設立され、最終的にガリシア自治憲章は承認された。スペイン亡命議会における自治憲章の承認は実質的に意味をなさないが、ガリシア評議会（すなわち亡命派ガリシア主義）の正統性を高めるといふ点で意義があった。一九四五年一二月、南米アルゼンチンに戻ったガリシア評議会の一行は、「ガリシア友の会」の歓迎を受け、自治憲章承認の成功を讃えられた。

その後、一九四六年、カステラオは、ホセ・ヒラルル亡命共和国政府首相の要請により、亡命政府の大臣に就任することとなった。その頃、スペイン亡命政府の拠点は、メキシコからフランスに移っていた。カステラオは大臣就任を承諾したものの、自身は南米のガリシア社会において活動を続けたいと考えており、パリに向かうことを快く思っていなかった。カステラオがパリに出発する前に開催された壮行会において、カステラオは「私はスペインの大臣になりたかった訳ではなく、ガリシアの代表 (Pragante) になりたかったのである」と語っている⁽¹⁷⁾。

こうして、カステラオはパリに拠点を移し、スペイン亡命政府におけるガリシアの代表（無任所大臣）として活動を始めた。しかし、ピニエイロを中心とするガリシア主義の国内派は、亡命派のカステラオが大臣に就任したことに、このまま亡命派がガリシア主義を担っていくのではないかとの懸念を募らせ、国内派と亡命派の対立が激化していく。ガリシア主義内部の争いに労を費やすうちに、結局ヒラル政権が終了したことにより、一九四七年、カステラオは失意のうちにアルゼンチンに帰国することとなった。帰国後は執筆活動に注力したが、一九五〇年一月、ブエノスアイレスで息を引き取った。

カステラオの葬儀はブエノスアイレスで催されたが、カステラオの生地であるガリシアのリアンシヨやサンティアゴにおいてもミサが執り行われた。当時は既にフランコ体制が強固になりつつあったが、フランコ政権幹部は、カステラオの死をきっかけに、ガリシアにおいてガリシア主義が再興することを恐れていた。そのため、フランコ政府報道は、新聞各社宛に「共和国の政治家であり、ガリシアの分離主義者であるアルフォンソ・ロドリゲス・カステラオ氏がブエノスアイレスにおいて死去したことに関し、以下の通り警告する。カステラオ氏の死に関する報道は、新聞紙の一面に掲載してはならず、一段組とする。写真を掲載する際は、政治的行事における写真を使用してはならない。カステラオ氏のユーモア作家、文学家、戯画家としての側面のみを褒め称えるものとする。政治的側面を強調することも可とするが、その場合、それが誤った行いであり、同氏が犯した罪に対する神の慈悲が期待されている旨言及することとする。同氏の文学・芸術活動に言及する際、『センプレ・エン・ガリサ』や内戦が描かれた戯画集については触れないこととする」との警告文を送っている。¹⁸ フランコ政権にとって、カステラオがいかに影響力を有していたかを認識していたことを窺い知ることができる。リーダーを失った亡命派のガリシア主義の運動は、大きく後退

していくこととなる。

スペイン内戦前後でガリシア・ナシヨナリズムに最も影響を与えた人物は、カステラオであろう。ガリシア主義党を創設したカステラオは、小説家、画家としても活動しており、内戦中及び内戦後も文筆活動・芸術活動を続け、作品を通じてフランコ体制を批判した。カステラオの作品の中でも、『センブレ・エン・ガリサ（ガリシア語で「いつもガリシアに」の意）』は彼の政治思想の集大成である。同著は、一九三五年にスペイン西部の町バダホスで、一九三七年にバルセロナ及びバレンシアで、一九四〇年にニューヨーク及びアルゼンチンへの途上で、一九四三年にブエノスアイレスで執筆された記事をまとめたものであり、一九四四年にアルゼンチンで出版された。晩年の一九四七年にフランスで執筆された章が加えられた第二版が一九六一年に出版されている。『センブレ・エン・ガリサ』は「ガリシア主義のバイブル」と評され、二〇世紀後半以降のガリシアにおける「新しいナシヨナリズム」に大きな影響を及ぼすこととなる。⁽¹⁹⁾

五―三 国内派によるガリシア主義

内戦終結後、スペイン国内においても、ガリシア主義党の再結成が図られた。再結成の中心となったのが、内戦前にガリシア主義党の青年組織「ガリシア主義青年連盟」で活躍したラモン・ピニエイロである。ピニエイロは、内戦後もスペインに残っていたガリシア主義党のメンバーに連絡を取り、再結成を働きかけた。その結果、一九四四年には「ガリシア民主同盟議会 (Xunta Galega de Alianza Democrática)」が結成され、また、一九四五年七月にはガリシア主義党が再結成された。

しかし、一九四六年にガリシア主義の国内派の実質的な指導者となっていたピニエイロが逮捕されると、国内におけるガリシア主義勢力の活動は停止状態となった。一九四九年にピニエイロが出所すると、ガリシア主義党はそれまでの活動方針を大きく転換させ、文化活動を通じてガリシア主義を継続させようと試みた。フランコ独裁体制下では、一定の範囲内で地域の文化活動が許されていたため、ピニエイロは一二五名の出資者を集め、オテロ・ペドラージョと共にガラクシヤ社を設立した。ガラクシヤ社はガリシア語による書籍の出版を復活させ、一九五一年に一二冊の本が出版された。逆境の中で最善を尽くすピニエイロの戦略の目的は、若者に対するガリシア・ナシヨナリスト教育を通じて、将来のガリシア主義のリーダーの誕生の可能性を確保することであった。ピニエイロの狙いは、フランコ体制と対立せず、また、政党を結成することなく、ガリシア社会を「ガリシア主義化」することであった。

しかし、国内派の穏健な文化活動は、亡命派の反発を生んだ。特にアルゼンチンにおいて、カステラオの思想を受け継いだ急進派は、ピニエイロら国内派の戦略はガリシア主義を大衆ではなく学術エリート⁽²⁰⁾の活動に縮小させるものであると批判した。また、内戦期以降、政治活動やガリシア語による出版等の文化活動を続け、ガリシア主義を継続してきたのは国内派ではなく亡命派であるという誇りがあったのかもしれない。しかし、強力な指導者を失った亡命派にとって、主導権を取り戻す余力はなく、結果として、一九五〇年代以降は目立った活動は行われず、ガリシア主義は衰退した。

その後ガリシア主義は、フランコ独裁体制後期の一九六〇年代以降に「新しいナシヨナリズム」と呼ばれる運動が起こり、復活の兆しを見せ始めることになるが、スペイン内戦前におけるガリシア主義の高まりは失われていた。ガリシア主義の歴史的断絶は、スペイン民主化以降のガリシア主義の発展に影響を及ぼすこととなる。

六 むすびにかえて

ガリシアにおける地域ナシヨナリズムは、他地域と比較して弱く、その要因として、ガリシア人の多くが「スペイン」と「ガリシア」の二重のアイデンティティを有することが挙げられる。かかるアイデンティティが形成された背景には、地域ナシヨナリズムの誕生・発展経緯やその時代の社会経済状況の特殊性が挙げられる。

本稿では、ガリシアの特殊性について、地域ナシヨナリズムの形成から発展、そして内戦期の状況に焦点をあてて考察したが、当然のことながら、地域ナシヨナリズムが形成される以前の状況も背景にある。ガリシアにおいて地域ナシヨナリズムが形成される以前の背景として、ガリシア研究者のベラメンディ氏は以下の三つの点を挙げて⁽²¹⁾いる。まず、ナシヨナリズムの萌芽となった「プロビンシアリズム」の時代において、地域のエリートを結びつけ、政治意識を醸成するための集まりが存在していなかった点である。カタルーニャやバスクには君主政の時代から同業者組織が形成されていたが、ガリシアにおいては地域ナシヨナリズムの波が訪れた際にそれがなかった点を指摘している。確かに、ガリシアにおいては、プロビンシアリズムの担い手の大半が大学生であり、中産階級を巻き込んだ政治運動にすぐには発展していない。

第二に、社会経済構造の特異性を指摘している。ガリシアにおいては教会が多くの土地を支配しており、その経済力、組織力、思想の影響力は強大であった。また、社会構造は郷土及び小作農によって形成されていた。ガリシアにおいては、一二世紀頃から三世代固定の借地制（フォロ制）が続いていた。教会の土地は郷土と呼ばれる下級貴族に

貸し出され、その土地はさらに小作農に貸し出され、郷土は農民に穀物の現物支払いを強制した。かかる制度により、一次産業が維持され、工業や商業の発展が阻害され、ブルジョワジーの誕生が遅れた。また、制度の固定化によって、教会や貴族に対する服従のメンタリテイが形成された。一八世紀頃から小規模ながらブルジョワジーが生まれつつあったが、かかる状況により、明確に新しい社会階層を形成するには至らず、地域ナショナリズムの担い手にはなりえなかったのである。

第三に、エスニシテイの両義性を指摘している。ガリシアが独自の言語や文化を有していることは自明であり、ガリシアにおいて地域ナショナリズムの重要な要素となつている。他方で、社会の上流階級（特に聖職者）がスペイン語化を進める過程において、ガリシア語話者（特に小作農）が下流階級と位置づけられるようになった。ガリシア語に対するネガティブな印象は、一九世紀のスペイン自由主義国家体制にさらに顕著となり、また、スペインのその他地域やアメリカ大陸のガリシア移民社会にも持ち込まれた。したがって、言語の特異性に基づく「ガリシアのネイション」という概念は、ガリシア語に対するネガティブな印象が強力な抑止剤となり、社会に広がりを見せなかつたのである。現代においては緩和しつつあるが、このような状況はまだ残っている。

かかる状況を前提に考えると、ガリシアにおける地域ナショナリズムの形成及び発展がいかに困難を伴ったかが容易に想像できる。このような背景があるにもかかわらず、ガリシアにおいては、スペイン内戦直前に地域ナショナリズムが高まり、あらゆる社会階層の支持を獲得するに至り、ついにはガリシア自治憲章が住民投票で可決されるに至っている。

しかし、内戦前のガリシア主義者は、カタルーニャやバスクと異なり、スペインとの対立するのではなく、むしろ

忠誠の姿勢を示していた。ガリシアは歴史的に農村地域であり、フォロ制の維持によって、産業の発展が遅れた。産業が発展し、経済的に豊かなカタルーニャやバスクとは反対に、貧困地域であったガリシアにとってはスペイン中央政府との良好な関係を維持することが重要であったと考えられる。

当時の多くのガリシア主義者にとって、スペインは複数のネイションによって構成される国家 (Estado plurinacional) と捉えられていた。ただし、スペイン国家を構成するカステイリヤ、カタルーニャ、バスク及びガリシアのうち、カステイリヤが国家の枠組みの中でカステイリヤの文化を他のネイションに強要したため、それを正すことがガリシア主義者の目的だったのである。すなわち、ガリシア主義者の運動は、スペインではなく、カステイリヤに対する抵抗だったと言える。⁽²²⁾ ガリシア主義党は、共和国内でのガリシア自治推進という現実路線を歩むこととなった。

内戦が始まると地域ナシヨナリズムの動きは大きく後退し、フランコ独裁期においては政治的活動がほとんど見られなくなった。上述の地域ナシヨナリズム形成以前の社会経済の特異性がフランコ独裁を受け入れるのに十分な土壌となり、ガリシア出身のフランコの政策に従うこととなったのである。こうして内戦前に起こったガリシア主義の高まりを維持することができず、一過性のものとなってしまったのである。

ガリシア主義の高まりを維持できなかった要因としては、内戦前のガリシア主義の中心人物であったカステラオがガリシアから遠く離れたアルゼンチンに亡命した点も挙げられる。ガリシア移民の多かったアルゼンチンにおいて、カステラオの思想を支持する者も多かったが、アルゼンチンに期待を抱いて移民したガリシア人が必ずしもガリシア主義者だったわけではない。下流階級が話す言語と位置づけられていたガリシア語を話すのをやめて、新天地でスペイン語を話し始める人がいたとしても不思議ではない。また、カタルーニャやバスクがフランスを拠点に活動を続け

る一方で、本国からの情報が不足する南米に拠点を構えたガリシアの亡命指導部の認識は現実から乖離したとの見方もある。⁽²³⁾

また、カステラオの死後、亡命派では後継者が登場せず、文化活動が中心の国内派に主導権が移された点もガリシア主義の後退の要因である。フランコ体制初期においても、カタルーニャやバスクでは、内戦前の運動が継承され、また、若い世代が新たな運動を始めていたとは対照的に、ガリシアでは一旦断絶しているのも特徴であろう。この頃に進められたフランコによる「スペイン化」によって、ガリシアにおいては、保守的思想が益々定着したのである。フランコ政権もカステラオの活動を警戒していたが、カステラオの死がガリシア主義後退の決定的要因となった。

ガリシアにおいて地域ナシヨナリズムが他の歴史的自治州と比較して弱い理由については、地域ナシヨナリズム形成前の社会経済的背景に加え、第二共和政期に発足したガリシア主義党が共和国内での自治推進という現実主義的路線を選択したことが挙げられる。さらに、ガリシア主義党の指導者がラテンアメリカに亡命し、その後死亡したことにより、運動が断絶してしまっただけでなく、ガリシアにおいては、一九六〇年代にガリシア主義が再興するが、ガリシア全体を巻き込む運動には発展せず、マルクス主義の影響を受けた左派勢力を中心とする運動となったこともかかる歴史的経緯によるものと考えられる。

(1) 大木雅志「ガリシアにおける新しいナシヨナリズム」(坂東省次監修・牛島万編著『現代スペインの諸相―多民族国家への射程と相克』明石書店、二〇一六年)

(2) 二〇世紀後半以降のガリシアにおける地域ナシヨナリズムの動向については、拙稿「ガリシアにおける新しいナシヨナリズム」(坂東監修・牛島編著前掲注(1))を参照されたい。

- (3) 萩尾生「自治州国家スペインにおける「歴史的諸法」」(宮島喬／若松邦弘／小森宏美編『地域のヨーロッパ』人文書院、二〇〇七年) 九四―九五頁
- (4) アントニー・D・スミス(高柳先男訳)『ナシヨナリズムの生命力』晶文社、一九九八年、一一二頁。スミスは、スペインにおけるエスニックナシヨナリズムの一例としてガリシアに触れているが、分離主義的エスニックナシヨナリズムの類型にはカタルーニャ及びバスクについての言及している。
- (5) 立石博高「国民国家の形成と地域ナシヨナリズムの擡頭」(立石博高／中塚次郎編『スペイン国家と地域―ナシヨナリズムの相克』国際書院、二〇〇二年) 二八―三〇頁
- (6) 立石博高「スペインの諸言語と地域ナシヨナリズム」(立石博高／内村俊太編『スペインの歴史を知るための50章』明石書店、二〇一六年) 三五三―三五七頁
- (7) 武藤祥「地域ナシヨナリズムの台頭」(立石／内村編前掲注(6)) 一三四―一三九頁
- (8) 中塚次郎「多元的国家体制の模索」(立石／中塚編前掲注(5)) 三八頁
- (9) Beramendi, Justo, *El Nacionalismo Gallego*. Madrid: Arco Libros, 1997, pp. 35-36
- (10) Villares, Ramón, *Historia de Galicia*. Vigo: Editorial Galaxia, 2004, p. 393
- (11) Gemie, Sharif Galicia: *The concise history. 1st edition*. Cardiff: University of Wales Press, 2006, p. 102
- (12) Beramendi, Justo, *El nacionalismo gallego*. Madrid: Arco Libros, 1997, p. 52
- (13) 中塚次郎「ガリシア主義の歴史」(立石／中塚編前掲注(5)) 二〇八頁
- (14) ガリシアは、「ア・コルーニャ県」「ビーゴ県」「ルーゴ県」及び「オウレンセ県」の四つの県(プロビンス)によって構成されていた。
- (15) ガリシア (Galicia) ‘バスク (Euzkadi) ‘カタルーニャ (Cataluña) のそれぞれの名称の文字をとり、ガレウスカ (Galeuzca) と命名した。
- (16) Gemie, Sharif Galicia: *The concise history. 1st edition*. Cardiff: University of Wales Press, 2006, pp. 110-111
- (17) Diéguez Cegúel, Uxío-Bregán, *Nacionalismo gallego aquén e alén mar*. Santiago de Compostela: Edicións Laiovento, 2015, p. 142

- (18) Diéguez Cequiel, Uxío-Breogan. *Nacionalismo galego aquén e alén mar*. Santiago de Compostela: Edicións Latiovento, 2015, pp. 147-148
- (19) Quintana Garrido, Xosé Ramón. *Un longo e tortuoso camiño*. Vigo: Editorial Galaxia, 2010, p. 24
- (20) Gemie, Sharif. *Galicja: The concise history. 1st edition*. Cardiff: University of Wales Press, 2006, pp. 115-116
- (21) Beramendi, Justo G. "El Galleguismo Político (1840-1936)." in: De Juana, Jesús y Julio Prada. *Historia contemporánea de Galicia. 1ª Edición*. Barcelona: Editorial Ariel, 2005, pp. 493-517
- (22) Bramendi, Justo. "Proyectos Gallegos para la articulación política de España" in: Garcia Rovira, Anna Maria (ed.), *España, ¿nación de naciones?*. Madrid: Marcial Pons Historia Estudios, 2002, pp. 159-160
- (23) 中塚次郎「ガリシア主義の歴史」(立石／中塚編前掲注(5))、二二八頁

参考文献

- 碓順治『現代スペインの歴史―激動の世紀から飛躍の世紀へ』彩流社、二〇〇五年
- 大木雅志「19世紀のガリシア―ガリシア主義のはじまり」、「20世紀のガリシア―ガリシア・ナショナリズムへの発展」、「スペイン内戦とガリシア―石のように冷たく重苦しい長い夜」、「スペイン憲法公布後のガリシアとガリシア自治州憲章―ガリシアの夜明けと自治権獲得」、「EU加盟後の現代のガリシア―新しいガリシア主義の時代へ」(坂東省次／桑原真夫／浅香武和編『スペインのガリシアを知るための50章』明石書店、二〇一一年)
- 大木雅志「ガリシアにおける新しいナショナリズム」(坂東省次監修・牛島万編著『現代スペインの諸相―多民族国家への射程と相克』明石書店、二〇一六年)
- 大島美穂編『国家・地域・民族』勁草書房、二〇〇七年
- アーネスト・ゲルナー(加藤節訳)『民族とナショナリズム』岩波書店、二〇〇〇年
- アントニー・D・スミス(高柳先男訳)『ナショナリズムの生命力』晶文社、一九九八年
- 立石博高／内村俊太編『スペインの歴史を知るための50章』明石書店、二〇一六年
- 立石博高『スペイン・ポルトガル史』山川出版社、二〇〇四年

- 立石博高／中塚次郎編『スペイン国家と地域—ナショナリズムの相克』国際書院、二〇〇二年
- 立石博高／若松隆『概説スペイン史』有斐閣、一九八七年
- 宮島喬／若松邦弘／小森宏美編『地域のヨーロッパ』人文書院、二〇〇七年
- 若松隆『スペイン現代史』岩波書店、一九九二年
- Beramendi, Justo. *El nacionalismo gallego*. Madrid: Arco Libros, 1997.
- Castelao, *Sempre en Galiza*. Vigo: Editorial Galaxia, 2004.
- De Juana, Jesús y Prada, Julio. *Historia contemporánea de Galicia*. 1ª. Edición. Barcelona: Editorial Ariel, 2005.
- Dieguez Cequiel, Uxío-Breogán. *Nacionalismo galego aquí e alén mar*. Santiago de Compostela: Edicións Lairovento, 2015.
- García Rovira, Anna María (ed.). *España, ¿nación de naciones?*. Madrid: Marcial Pons Historia Estudios, 2002.
- Gemie, Sharif. *Galicia: The concise history*. 1st edition. Cardiff: University of Wales Press, 2006.
- Julía, Santos. *Historia de las Dos Españas*. Madrid: Santillana Ediciones Generales, 2004.
- Meixome Quinteiro, Carlos Meixome. *Textos e Documentos para a Historia Contemporánea de Galicia (século XX)*. Vigo: Edicións do Cumio, 1999.
- Parlamento de Galicia. *Estado de Autonomía 1936 e 1981*. Parlamento de Galicia, 2011.
- Quintana Garrido, Xosé Ramón. *Un longo e tortuoso camiño*. Vigo: Editorial Galaxia, 2010.
- Ríos, Xulio. *Galicia e a sociedade das nacións*. Vigo: Editorial Galaxia, 1992.
- Saz Campos, Ismael. *España contra España*. Madrid: Marcial Pons, Ediciones de Historia, 2003.
- Villares, Ramón. *Breve historia de Galicia*. Madrid: Alianza Editorial, 2003.
- Villares, Ramón. *Historia de Galicia*. Vigo: Editorial Galaxia, 2004.
- (デロイトトーマツファイナンシャルアドバイザー合同会社 国際開発アドバイザリー コンサルタント)